

1. 巡礼の手順

巡礼は1年の特定の期間に特定の場所で行なわれ、このあいだ巡礼者は、「イフラーム」と呼ばれる状態に入る。有効にイフラームに入ることのできる場所と時期は限定されていて、いずれも「ミーカート」と呼ばれる。

場所についてのミーカートは、巡礼者がやってくる方角に応じて預言者が定めた5つの地点とされる。たとえばメディナからの巡礼者については、メッカの北方500 kmのズー・アル＝フライファに到着することによりイフラームに入る。時期についてのミーカートは、シャウワール月（ヒジュラ暦の第10月）またはズー・アル＝カアダ月（第11月）または巡礼が行なわれるズー・アル＝ヒッジャ月（第12月）の最初の9日のあいだとされる（コーラン第2章第197節参照）。

巡礼を行なおうとする者は、いま述べたような限定された場所と時期において、まず身を清め、男性はやはりイフラームと呼ばれる縫い目のない2枚の白い布をまとう。1枚はイザールと呼ばれ、腰に巻き、もう1枚はリダーと呼ばれ、左肩から掛ける。女性については衣服の定めはとくにない。それから一定の礼拝を行ってから、自分がいまから巡礼を開始しようとする意思表示を行なう。こうしてイフラーム状態に入った後は、それが継続する限り、香水の使用、性交、（多数説によれば）婚姻、狩猟、爪や髪を切ること、髭を剃ることなどが禁じられる（そのため、イフラームに入る前に爪や髪を切り髭をそることが推奨される）。それから、タルビヤと呼ばれる文句を唱えつつ、ズー・アル＝ヒッジャ月8日までにはメッカに入らなければならない。

2. モスクの創設

モスクはいかにして成立するか。ハナフィー派（スンナ派正統4法学派の一つ）は、ある個人がモスクを建設した場合についてつぎのように述べている。ある者がモスクを建設した場合、それを彼のやり方でその所有からの「分離」と、人々にそこで礼拝することを許すことによって初めてモスクはその所有権を離れる。ここで「分離」とは、神に捧げられるモスクをいわば世俗的な目的から切り離すことである。それゆえ、モスクの下に地下室がある場合、その地下室がモスクの便民施設でなければ、人間の権利がモスクに付着していることから、モスクは建設者の所有に属していることになり、建設者はこれを売却することができるし、建設者が死亡すれば相続の対象になる。もう一つの条件である礼拝は、引渡の意味を有するとされる。ただし、一説によれば一人がそこで礼拝を行えば足りるのにたいして、別の説は、集団での礼拝が行われて初めてモスクは建設者の所有を離れるとしている。しかしさらにもう一つの説は、この2つの条件を不要とし、建設者が「私はそれ（＝モスクとして建設した建物）をモスクとする」と言えば、人間の権利が消滅し、神にのみ捧げられたとみなしている。モスクを廃止することは原則としてできないが、モスクの周囲が荒廃してそこで礼拝をする者がいなくなった場合について、モスクは廃止されないとする説と、モスクを建設した目的が失われたことを理由に、建設者ないしその相続人の所有に復帰するとする説が唱えられている。

3. イジュマーとは何か

イベリア半島で活躍したマーリク派（スンナ派正統4法学派の一つ）の法学者バージー（1081年没）は概略つぎのように述べている。神が信徒に法的責任を負わせている以上、神は信徒に、独力で法を発見するための手段を与えているはずである。というのは、日々生ずる法的事案の類型は無限であるのに、啓示はもはや下されないからである。そのような法発見の手段が、理性的徴表に依拠した推論である。各法学者がこのような推論を行った上で合意に達した場合にのみイジュマーが成立する。一定の学識を備えた法学者の合意が誤ることがないのは、究極的には神の恩寵によるが、経験則からいっても、優れた法学者がそろって誤謬に陥ることはありえない。たしかにユダヤ教徒やキリスト教徒は揃って誤謬に陥っているが、これは彼らの法的推論の前提たる信仰がすでに誤っているからである。